

# ポローニア

paulownia

附属学校の  
特色ある実践の今、

新たな  
なる発信



筑波大学附属学校教育局  
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/>

vol. **26**



# 附属学校の未来を思え



副学長・理事・附属学校教育局教育長  
**東 照雄**

TERUO  
HIGASHI

昨年5月の本紙に同じタイトルで、附属学校の未来に向けた取組みとして、3つの拠点構想の更なる推進、とくに国際交流や英語教育の格段の工夫・充実等によるグローバル人材育成の重要性について指摘しました。これらのことは、本学の第二期中期目標・中期計画に記されており、その4年目に入る今年4月からは、新しく始まったチャレンジ計画の中にも一貫グローバル教育の推進として明記されました。

ところで、附属学校教育局HPに毎月連載している「教育長の一言」で、心の病や病気になる教職員の増加について触れました。国立大学法人への運営費交付金の毎年の減少を考えると、人員の増員は極めて困難な現状です。次善策として、附属学校の教育・研究・運営に関わる全ての活動内容を改めて点検し、優先順位を検討しながら、構成員全員が協力して職場環境を改善するしか他に良い方法が無いようにも思えます。今年は、各学校がそのことに取り組むことを期待しています。さて、附属学校では、その存在意義が国民から常に問われていることを意識しながら、各学校の特色を活かして、今年も様々な活動を展開しなければなりません。自民党政権が復活した今年、教育再生会議の再開により、学校教育の在り方が随分と変化する可能性があります。必ずや、この動きは、附属学校にも影響するでしょう。このような時代にこそ、従来から培ってきた教育理念および実践を活かしながら、将来を担う子供たちの視線に立った教育に邁進する必要があります。経済的閉塞感と外交・防衛の緊張感が造り出す不安定な社会的雰囲気や晴らすような活動を附属学校から先導的に行い国民に発信しましょう。

## 目次

■巻頭言

年頭の挨拶：附属学校の未来を思え ● 東 照雄

■記念式典

筑波大学附属小学校・創立140周年 ● 細水保宏 .....1

■放課後English Room

自由な英語空間 English Room を設置 ● 久保野りえ .....1

■退職の挨拶

教育課程研究に帰一集中する ● 館 潤二 .....2

駒場での自由な28年間 ● 宮崎 章 .....2

■文部科学大臣優秀教員表彰

附属中学校英語科における教育実践の源流をたどる ● 蒔田 守 .....3

■「科学の芽」賞

第7回「科学の芽」賞表彰式・発表会について ● 松本末男 .....3

■この指とまれ

人とのつながりで強くなれる ● 丸山功揚 .....4

■新任教員奮闘中

出会いに感謝！ ● 菅野佳江 .....4

■運動会

野比の丘で大運動会 ● 雷坂浩之 .....5

■文化祭

黎明祭にグローバル化を思う ● 初谷和行 .....5

■TOPICS

附属学校研究発表会＆春期研修会のお知らせ .....6

附属学校いも煮交流会 ● 松本末男 .....6

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア  
paulownia

vol.26

CONTENTS



# 筑波大学附属小学校・創立140周年

筑波大学附属小学校 副校長 細水保宏

筑波大学附属小学校は、去る1月15日に創立140周年を迎えました。本校は、明治6年に創立された我が国最古の国立小学校で、明治、大正、昭和、そして平成と、近代日本の教育の歴史と重なる時間を過ごしてきました。この間、師範学校附属小学校、東京高等師範学校附属小学校、東京教育大学附属小学校、筑波大学附属小学校等と名称が変わってきましたが、伝統と実績を積み重ねながら、常に初等教育をリードしてきた学校と自負しています。

式典は、講堂の耐震工事中のため、昨年の11月14日に行いました。航空写真と記念冊子、記念品、そして恒例の紅白饅頭を配布しました。式典当日は、ロンドンオリンピック体操日本代表選手で活躍した“美濃部ゆう”さん（現朝日生命所属）に来ていただきました。小学校在学時代の思い出をその当時の担任の先生とともに振り返るとともに、体操をして楽しかったことやオリンピックにおけるエピソードなどを、後輩たちに笑顔を交えながら話してもらいました。

また、舞台の上にマットを敷いての柔軟体操や模範演技の披露では、最前列の1年生児童をはじめ960名の全校児童から大きな歓声と拍手が上がっていました。



本校では、創立記念式典で毎回、先輩との交流の機会を設けていますが、今回の“美濃部ゆう”さんは、歴代先輩の中でも最年少でした。



## 自由な英語空間 English Room を設置

附属中学校 教諭 久保野りえ

附属中学校では、ALTが入るTTの英語授業は、各学年半年間週に1回のみです。しかも41人というクラスサイズでは、一人一人がALTと間近に会話できる時間は極めて短いものです。2012年度後期、国際教育推進のための予算がつき、初めての英語の少人数授業および、「English Room」を実現することができました。

English Room とは、TTの授業のある火曜と水曜の放課後3時半から5時にALTの先生に滞在してもらい、英語を話したい生徒が来室して先生と英語で会話を楽しむというものです。場所は英語科教官室隣の放送室に附属していたスタジオにカーテンやテーブルを入れて利用しています。10月末にオープンし、始めの週は自由に来る方式にしましたが、一度に来る人数が多すぎたため、2週目からは、2～3人のグループで予約方式にしました。1グループ10分が目安ですが、空いていれば延長できます。はじめは3年生の女子が多く来ていましたが、予約方式にしたおかげで、男子生徒や下級生も友達同士で予約に来て話しています。ギター持参で、ALTのマクレイ先生に歌を披露していた男子グループもありました。

部活動がある生徒も利用しやすいよう、途中から昼休みも30分開けることにしました。マクレイ先生は10分の間でも、始めの緊張が徐々に解けて、リラックスして話せるようになるのがわかる、と言われていました。

English Room を開設して感じることは、自ら意欲的に学ぶことの素晴らしさです。英語に意欲があり、たくさん話せるようになりたい、と望んでいる生徒はこの機会を活用して、実に生き生きと話しています。シンガポールから来た高校生との交流会でも、この成果をすぐに活かしているようでした。各教室への掲示と折々の昼の放送で宣伝していますが、今後今以上に多くの生徒に活用してもらえよう工夫していきたいと思っています。





# 退職の挨拶

## 教育課程研究に 帰一集中する

附属中学校 副校長 館 潤二



公立中学校2校で15年間、筑波大学附属中学校では22年間お世話になりました。

一校目では生活指導のイロハを習い、二校目ではサッカー一部指導と社会科指導を学びました。附属中学校に採用されたときには、何か別の「ステージ」に行ける気持ちがありましたが、期待と現実が大きく異なるものでした。生徒が違えば、そして何より学校の文化が違えば、これまで培ってきたものが、そう簡単には生かせないことに気付かされました。教師としての「再スタート」でした。

まず、教科の「先輩方」に脱帽でした。少し大袈裟ですが、授業がまさに教師と生徒とが学問をはさんで火花を散らす場であり、「より分かりやすく」よりも「より深く、よりおもしろく」が授業作りの基本となりました。そして「おもしろさ」の意味が、いかに幅広く奥深いものに気付かされました。教育課程研究の蓄積は分厚く、「本校の教育研究は、教育課程研究に帰一集中する」なる言葉が頭から離れなくなりました。戦前からの教科学習を中心とした修学旅行や校外学習、学級・学年づくりを目的にした校外活動、中学校では考えられないような自治活動の活発さ、そしておよそ40年前から始められた「総合学習」、道徳と特別活動を融合した「HRH」など、どれをとっても、中学校教育の範となるものばかりでした。それらを支える精神と指導の在り方をまがりなりにも分かってきたのが10年目。それを「改善」できるようになってきたのが15年目ぐらいだったでしょうか。しかし、そのころから独法化に伴う「改革の波」が押し寄せてきた気がします。

これまで築き上げてきた「善きもの」(something good)より、「新しきもの」(something new)こそが価値あるものとされ、「附属の存在意義」や「交流人事」が叫ばれるようになり、短期的な目標とその実現が求められるようになりました。J.デューイは、教育の目標に「善い人間」の育成を掲げ、不断に「善くなろう」とする過程を重視する教育を主張しました。ここで少し立ち止まり、この意味を考え直す必要があるのではないのでしょうか。

それにしても、筑波大学附属中学校で学んだものは実に多く、先輩と同僚に深く感謝するものです。そして、とくに副校長になってからは、筑波大学附属の先生方や学校教育局の方々に本当にお世話になりました。「ありがとうございました。」

## 駒場での自由な 28年間

附属駒場高等学校 副校長 宮崎 章



1984年9月に附属駒場中・高の日本史の教員として着任して以来、28年半の月日が経ちました。大学院博士課程から直接でしたので、幸か不幸か筑駒以外の学校を知りません。大学と名のつく所にずっといて、そして赴任した先が筑波大学附属。準備室は2人1部屋の大学研究室のようなものでしたから、大学にずっといたようなものでした。その自由な雰囲気の中で、授業も教科書どおりというよりは、学問の成果を中高生に分かりやすい形でどう伝えられるか、やがて年数が経てば教科書に載るような最新の内容のものを、学問の息吹に触れられるような教材として採り入れることをやってきたつもりです。振り返れば、もっとああすればよかったと思うことも多々あります。

最後の7年間は副校長を務めることとなり、自由な教師生活の恩返しを駒場にせよということかと思い、力を尽くしてきました。私が担任時代の最後の仕事として企画し、柿島眞前校長のご協力のもとで実現した中高生の筑波大学訪問は、改良を重ねつつ今日まで続いて高大連携の柱となってきました。前回の安倍内閣が導入した主幹教諭新設において、実質をとる形での筑波大学としての主幹教諭制度と教務補佐員体制の策定に、他の副校長の先生方と一緒に関わってきました。また現在は固まった形に思われている「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」という三拠点構想を、ほぼ毎週のペースで教育局に副校長が集まる中でつくっていった作業なども思い起こされます。これもまた安倍内閣の時に決まった教員免許状更新制度について、制度ができてしまった以上、少しでも先生方の役に立つ形をつくろうと、小林汎前教育長補佐らと一緒に、筑波大学駒場キャンパスでの3日間18時間にわたる教員免許状更新講習の企画・運営もやってきました。

自由な雰囲気を守りつつ、新しい時代に即応した附属学校にしていくことを、次の世代に引き継ぎたいと思います。

長い間、ありがとうございました。



## 附属中学校英語科における教育実践の源流をたどる

附属中学校 教諭 蒔田 守



### 英語科チームワークの出発点

平成8年度から4年間、「3年間を見通した英語指導」をテーマに掲げ研究実践を行った。それまで4人の英語教師が独自に行っていた言語活動を連携するよう努めたことを機に、教科のまとまりが深まった。同時に、「担当者が誰であれ、3年間で英語の基礎を鍛える英語科チームの一員」だと自覚するようになった。また同じ目標に向かう同志として互いの教材を提供するようになり、授業に広がりが生まれた。今では、「附属中学校英語科のチームワークは日本一」と自画自賛している。

### 互いを生かし合う仲間

附属中学校の教師は個性的である。しかし、その個性を殺すことなく、互いを生かし合いながら授業や学校行事に臨んできた。同僚は時に妬ましいほどのパワーやアイデアを見せつける。同僚は良きライバルであり、かけがえのない仲間である。この同僚との出会いと交わりなくして、今の自分は存在し得ない。より良い授業づくりもあり得ない。だから「蒔田先生の授業を参観させてください」と来校する方に、できるだけ同僚の授業も参観していただき、喜ばれている。

### 私の「教師としての基礎基本」は学生時代の経験

話題の「英語で進める英語の授業」は、都立新宿高校と国際基督教大学で生徒として体験した。今でも「真面目」だけが取り柄の私だが、学生時代はもっと融通が利かなかった。そんな私に東京YMCA武蔵野ランチでのボランティア活動は、人間理解の基礎基本を教えてくれた。毎週子どもたちと遊びながら、温かくこどもに接する大切さや、長所を探しながらじっくり向き合うことを学んだ。この頃までに、既に教師としての核は作られていたようだ。

このようにして教師の道を歩ませていただいている私は幸せ者である。



## 第7回「科学の芽」賞 表彰式・発表会について

附属学校教育局 教授  
松本末男

第7回「科学の芽」賞の受賞者の表彰式・発表会が、昨年12月22日に大学会館小ホールで行われました。今回は、小学生部門が10件、中学生部門が7件、高校生部門が3件の受賞となりました。

表彰式では、受賞者一人一人に、清水副学長から、表彰状と記念品が授与された。やや緊張した面持ちでいた子どもたちでしたが、賞状が授与され、副学長から握手されるとにっこりと笑って、賞状を受け取っていました。

各部門の作品について、小学生部門では、鷺見先生（附属小学校）、中学生部門では、真梶先生（附属駒場高等学校）、高校生部門では、鈴木先生（附属高等学校）の各先生から講評を頂いた。どの作品も不思議に思ったことを、独創的な視点から工夫して研究を積み重ねてきて、素晴らしい作品であるとの話がありました。

表彰式の後、一人一人が、自分の作品について、研究の発表を行い、どの受賞者も、しっかりと自分の研究を発表しました。どの受賞者も、発表する力がすばらしく、ポイントを押さえて、100名ほどの出席者を前に堂々と発表していました。小学生、中学生、高校生と発表が進むにつれて、高度な作品の内容になりましたが、成長を感じさせる発

表で、頼もしく思えました。

発表会終了後は、記念の写真撮影をし、その後お茶とケーキで、懇談会を行いました。懇談会では、受賞者の家族から、入賞の連絡があったときのエピソードも出されて、大いに盛り上がり、和気あいあいと全員で楽しむことができました。

「科学の芽」賞は、年々応募件数が増えており、受賞することが難しくなっています。そのような中で、毎年応募して入賞した児童生徒や、連続して受賞する児童生徒もいて、毎年継続して研究しようとするやる気や意欲を引き出すきっかけになっていると感じました。子どもの不思議に思う気持ちや、疑問に思う気持ちが、科学の進歩に寄与する第一歩だとしたら、今後もこの「科学の芽」賞が、子どもたちの科学する心に火をつけることができたらこんなに嬉しいことはないと思います。



この指とまれ この指とまれ この指とまれ



この指とまれ この指とまれ この指とまれ

## 人とのつながりで強くなれる

私は本校中学部の時に水泳部に入部し、本格的に競泳を始めて5年目になりましたが、高校2年生の時に出した自己ベストが更新できず不安に思う中、2012年11月に行われた日本身体障害者水泳選手権大会に出場することになりました。この大会には何度か出場しているのですが、ハイレベルでメダルになかなか手が届かず、今回は自己ベストを出すことを目標にしました。出場した種目は50m自由形と50mバタフライ、そして私の所属するチームの3連覇のかかったフリーリレーの第1泳者とメドレーリレーのアンカーを泳ぐことになりました。このチームには、本校の卒業生であり、2012年に行われたロンドンパラリンピックに出場し金メダルを獲得した秋山里奈選手と、銀メダルと銅メダルを獲得した木村



附属視覚特別支援学校専攻科 2年  
丸山功揚



敬一選手も所属していて、その2人のメダリストと一緒にリレーを泳げることになりました。リレーメンバーに選出された時は嬉しさ半分、不安半分で、普段よりも練習に一生懸命取り組みました。

そして大会当日。先輩方の励ましを受けながら、自分の現時点で出来る限りの泳ぎをしました。個人種目では両種目とも自己ベストを出し、50mバタフライでは1位、50m自由形では3位、フリーリレーとメドレーリレーでは3大会連続優勝をすることができました。リレー終了後にリレーメンバー全員で肩を組み喜び合ったことを今でも鮮明に覚えています。とても感動しました。

競泳を続けていて私は、人とのつながりが大切だと強く感じました。顧問の寺西先生の指導を受けながら、卒業した先輩方と一緒に練習したり、大会に出場したりして「先輩方のようにもっと早く泳ぎたい!!」と思えることが自分の水泳の記録を伸ばしていつにきていて感じています。そしてまた、自分の頑張りが中学部や高等部の後輩たちの刺激になっていれば嬉しいとも思っています。

これからも、人とのつながりを大切に自分を磨いていこうと思っています。

プールサイドで仲間たちと



## 出会いに感謝!

私は、昨年の3月に長崎県の特別支援学校を退職し、4月より本校でお世話になっています。この年末に帰省したときに、初任で受けもった生徒さんやお母さん方が集まってくれました。私が結婚したのを耳にしたそうで「ぜひ、集まりましょう」と再会の機会を作ってくれました。当時中学部の2年生でしたが、成人式以来久しぶりに会う生徒達は25歳になり、皆、すてきな青年になっていました。親元を離れて、自立した生活を送っていたり、学生の頃から得意としていたことを生かした職を続けていたり、現在の生活について、きらきらした表情で教えてくれました。自分らしくしっかりと生きている姿を見ることほど、うれしいことはないですね。

今回集まっていたいたなかに、当時なかなか心を開いていただけなかったお母さんがいたのですが、今回、私はその頃思っていたことを伝えてみました。それは「初任者

附属大塚特別支援学校 教諭  
菅野佳江



で嫌だったでしょう」ということです。そうすると、お母さんから「一生懸命に子どもたちに向かう姿と、小さなことでも良いところに目を向けてくれたことは忘れません」と返ってきました。私には、もったいない言葉です。確かに、初任のころを思い出すと、一つに集中するとそれしか見えないようながむしゃらな、今よりももっと不器用な自分が浮かびます。それが、自分にとっての初心だなと思います。この年末は、教員を続けられていることに感謝し、自分の初心というものを思い出す機会となりました。

本校では、ありがたいことに今年度が初任です。元気に登校してくれる生徒がいること、すばらしい先生方と一緒に仕事ができることに日々感謝し、自分のできる精一杯のことをしていきたいと思っています。これまでのように、これからも出会いを大切にしていきたいです。



## 野比の丘で大運動会

附属久里浜特別支援学校 副校長 雷坂浩之

平成24年9月29日(土)、筑波大学附属久里浜特別支援学校において、全校行事としては最大の運動会が開かれました。当日は、二つの台風が近づきつつあるほぼ絶望的な天気予報でしたが、野比海岸を見渡せる丘上のグラウンドは、朝から海風が爽やかな素晴らしい秋晴れとなりました。

プログラムは、幼稚部・小学部低学年・中学年・高学年に分かれて発表します。様々な演技や競技に一生懸命取り組む子どもたちに、お父さん・お母さん・おじいちゃん・おばあちゃんなど約100名のご家族と、全教職員、来賓の方々が、こちらも一生懸命声援を送りました。



ストーリー性のある「はらぺこあおむしのチャレンジ」という演技では、幼稚部の子どもたちが青虫の赤ちゃんに扮し、



ドキドキするような冒険を経て、最後に華麗でかわいい「蝶」に変身しました。予行練習の時には、一度も走ろうとしなかった小学部低学年の児童が、「紅白対抗リレー」の本番ではじめて全力疾走を見せてくれました。オリンピックイヤーに絡めた「のびリンピック」という演技では、中学年の児童が聖火を持って入場し、新体操のイメージでカラフルなリボンを振りながらダンスを披露してくれました。

本校の子どもたちは、全員が知的障害を伴う自閉症の子どもたちです。日頃の授業や運動会に向けて頑張ってきた練習の成果を、本番で思う存分発揮してくれました。

子どもたち全員の「成長した姿」に、保護者の方々および教職員共々心から感動し合える素敵な一日となりました。

## 黎明祭にグローバル化を思う

附属坂戸高等学校 教諭 初谷和行



附属坂戸高等学校の文化祭である「黎明祭」は、本年度で60回目を迎えました。本校で近年

推進している国際交流や国際理解教育といったことを意識して、第60回黎明祭は「国際」をテーマに行われました。

具体的には、各クラスにくじ引きで国を割り当て、各クラスはその国をテーマとしたクラス企画を実施しました。各クラスでは、その国にちなんだ食べ物を販売したり、アトラクションを実施したりしていました。

また、総合学科である本校は多彩な専門科目があり、その特色を活かした企画も特徴的です。例えば、農業科の科目を選択する生徒が本校で育てた野菜や卵、鶏肉を使って作るカレーやパン、味噌といった加工食品、食について学ぶ生徒が作る手打ちうどんなどは黎明祭の名物となっており、卒業生や保護者、近隣の方などが行列を作って買うほどの人気です。

その他にも、演劇部の公演や茶道部の茶道体験、かるた部の模範試合、特色のある授業活動の報告、PTAによるバザーなど様々な企画が行われました。

最初に述べたように本年度のテーマは「国際」ですが、本年度は裏テーマとして「3R」がありました。各企画とも「3R」を意識して、計画・準備・実施・片付けが行われました。「3R」を意識した文化祭というのはある種矛盾を抱え込んだようなものであり、大変難しい取り組みだと思えます。しかし、生徒にとっては環境問題について実践的に考えるよい機会になったのではないかと思います。

グローバル化というのは「多様化」と「普遍化」の二つの方向性からなり、その両方が作用し合いながらすすむとある人が述べています。文化祭にそのような高尚なことを持ち込むのも何ですが、多様な学びをしている本校の生徒たちが、共通のテーマのもとで団結し、多様な企画を生み出して実施している姿を見ると、頼もしく思えます。





## 平成24年度 筑波大学附属学校教育局春期研修会

平成24年度筑波大学附属学校教育局主催の春期研修会を、次の要領で開催いたします。毎日新聞社社会部部長委員 萩尾信也氏による講演、本学附属桐が丘特別支援学校小学部児童による英語劇「ももたろう」が予定されております。

**日 時:**平成25年2月23日(土) 10:00～13:30

**場 所:**筑波大学東京キャンパス文京校舎(東京都文京区大塚3-29-1)

## 平成24年度 筑波大学附属学校研究発表会

附属学校教育局では、平成24年度研究発表会を下記の通り開催します。本学の附属学校及び附属学校教育局における日頃の研究成果を発表し、皆さま方にご理解をいただくとともに、今後の教育研究活動の一助としていただければと考えております。

**日 時:**平成25年2月23日(土) 13:40～18:00

**場 所:**筑波大学東京キャンパス文京校舎(東京都文京区大塚3-29-1)

**研究主題:**「学校教育改革としての3拠点活動のさらなる発展に向けて～筑波大学附属学校からの発信～」

詳細については筑波大学附属学校教育局ホームページ  
[<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp>]をご確認ください。

## 附属学校いも煮交流会

昨年12月1日(土)に、附属坂戸高等学校の多目的交流棟において、初めて、附属学校の交流会が開催された。坂戸高校の多目的交流棟は、11月にお披露目されたばかりの施設で、部活の合宿、大学生の実習時の宿泊、授業、国際交流会などの際に使われている。多目的な建物であるため、今後附属学校間の交流など様々な用途に使われることが期待されている。今回の交流会は、同じ附属学校であるが、なかなか交流することの少ない教員間の交流をしようという目的から行われた。初めての交流会で、仕事の都合で、参加できない学校もあったが、11校中9校が参加し、40名近い参加者が集まった。坂戸高校の農園で栽培された野菜をふんだんに使い、日頃なかなか包丁を持つことの少ない教員が包丁を握って、野菜を切ったり、いも煮の味付けをした。またこの日、坂戸高校の先生による指導で、巻き寿司を作った。巻き寿司も、花の模様が出る太巻きから韓国風の巻き寿司など、日頃食べられない巻き寿司の数々ができあがった。うまく巻けなかったり、花の形にならなかったり、御飯が多すぎてうまく巻けないお寿司もあり、大いに盛り上がった。いも煮は、建物の外に薪ストーブを設置し、坂戸高の先生にストーブの係をやっていただいた。途中で雨や雪が降り出したが、食べる頃には晴れて、参加者みんなで食事会となった。食事中にまた来年も!という声も聞かれ、是非継続したいと思っている。今年度参加できなかった先生方、是非来年は参加してください。(松本末男)

## 《編集後記》

平成25年が始まりました。ここ市川に建つ附属聴覚特別支援学校は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の影響が未だに残り、現在、校内の80カ所で放射線量の定点測定を毎月一回行っています。この測定は、昨年11月で13回を数えました。夏には教員有志による除染作業を行いました。子どもたちが日頃使う中庭の放射線量が下らず、この冬休みに大がかりな除染作業を行いました。中庭の土は、敷地外に持ち出しができないため、この作業は放射線量の低いグラウンドの土との入れ替えとなりました。写真は、2012年12月26日に撮影した袋詰めになった中庭の土です。一つの袋は1立方メートルほどです。これを少なくとも100袋は重機で移動しました。中庭の放射線量は、これまで0.25  $\mu$ sv/h前後であったものが、この除染作業後には0.08  $\mu$ sv/hまで激減し、室内の数値と同程度になりました。新しい年に心機一転、聴覚障害教育の専門性の明確化と、その受け継ぎのために、足元を固める実践に勤しみたいと改めて決意しました。(板橋安人)



**ポローニア**  
paulownia

vol.26

発行日……平成25(2013)年 2月21日

発行者……附属学校教育局教育長 東 照雄

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌  
ポローニア編集委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

編集委員長……田中輝美

編集委員……菅野和恵・大島由之  
小林美智子・板橋安人

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙:U-Itimax [日本製紙]